

「私たちにできることは」

学生主体の建築活動 (ボランティア・実践・制作・研究)

話題提供学生、参加ディスカッサー

1. はじめに(テーマの主旨説明として)

東日本大震災という大災害をまのあたりにして学生の皆さんは「だからこそ日々の日常活動を大切に」と考え、自らの設計、まちづくり、すまいづくり、種々ボランティアなど、旺盛なチャレンジ精神で主体的に精力的に活動しております。

今回のシンポジオンでは、こうした熱い思いを持つ彼らと皆さんと語り合いたく、学会大会期間の中日に語り合いの場を設け、関東地区の大学の皆さんに呼びかけたところ、4チームがエントリーされました。

当日は、学生の皆さんおよび職業人(研究者・教育者・実務者)の皆さんで、大いにコミュニケーションを楽しむことができました。ここに、そのときの様子をご報告いたします。

なお、シンポジオンでは、単なる(ボランティア、研究・デザイン・ワークショップの)発表の場とすることなく、参加者全員が「学生の志を育む」という立場で自由に交流・討議し語り合うことを目的としております。



各チームスタンバイ



全体で討議

1.2. 開催概要

日時：8月24日(水) 14:00-16:30

会場：早稲田大学(大会会場) 10号館1階108講義室

話題提供学生：4チーム 参加者25人

早稲田大3人、東大4人、関東学院大5人、

日本女子大1人、福井大2人、一般10人

実施タイムテーブル(以降敬称略)

司会：野田真士(福井大学院生)

14:00-14:05 趣旨説明と実施要領 by 栗原知子(福井大学)

14:05-15:05 各チームの発表 15分/チーム、計4チーム

15:05-16:00 語りあい1(全体討議)

16:00-16:25 語りあい2(個別に語り合い)

16:25-16:30 各チームまとめ、全体まとめ(by 栗原知子)

提供学生チームとテーマ

1：早稲田大学チーム；代表：大橋清和(M2)

題目：「新潟県中越沖地震の復興プロセスと学生」

2：東京大学生産研チーム；代表：岡村健太郎(D1)

題目：東日本大震災での活動(仙台被害認定調査支援、大槌瓦礫(おもいで)プロジェクト)

3：関東学院大学Aチーム；代表：村上祐香(M1)

題目：「笑顔のかまいし応援隊」

4：関東学院大学Bチーム；代表：菊地未来(M1)

題目：「LDSEについて」



個別討議、チーム入り混じって

3. 各グループの発表と語り合い

3.1 「新潟県中越沖地震の復興プロセスと学生」

早稲田大学：大橋清和(M2)、川副育大(M1)、木瀬大輔(M1)、北岡 亮(M1)

発表概要：(大橋清和記述)

中越沖地震で被害を受けた柏崎市えんま通り商店街の復興の流れについて報告をおこなった。

まずは、3つの段階(復興ビジョンの検討/復興まちづくりの目標空間像の検討共有/具体的なプロジェクトの進行)で復興まちづくりが進んでいった事を説明した。その中で、震災後1週間後から復興を考える会議が始められ、4年以上たった今でも毎週行っていることや、その体制の変遷、大学や専門家の関わり方などに触れた。

次に、合意形成手法として行ったワークショップについて、

模型を使った「建替えデザインゲーム」を取り上げながら、動画を用いながら、企画やファシリテーターなどの運営を学生が行っている様子を見せた。ワークショップの成果であるまちづくりガイドラインを紹介も行った。

最後に、えんま通りにおいて学生が支援できた事として、①ワークショップの企画運営②模型作成等の合意形成支援③計画案の検討の点で関わられたとまとめた。

■ 質疑応答

・ 関東学院の場合、住民はトップの方々だけで一般住民は参加していなかった。えんまの場合、協議会を開催するとき住民（商人）はどのくらい参加していたのか？

⇒ 商店会のほとんどの方が会議には参加していた。週一度の幹事会も現在も行われている。佐藤研究室はプロセスを重視しているため、協議会などの体制づくりが重要であると思う。

・ 大槌ではアーケードの再建が商店街の復興の際、重要と考えている。アーケードをえんま通り商店街では、なぜ撤去したのか？

⇒（当時参加していたわけではないので、推測になるが）アーケードが倒壊してしまっていた。また、えんまでは積雪があまりなくアーケードの再建よりも住宅を再建する事を優先したため。

・ 震災復興に学生が関わることの意義について、勉強になっているのか、それが地元のためになったのか？

⇒ 学生が関わることのメリットは、ある程度自由な発言・提案も許されること。また、地元の方も、学生には自由にいろいろ話してくれやすいことがある。自由とはいえ、当然、無責任なことではできず、WSのやりっ放しや提案しっ放しは一番してはいけないことであることも学生自身が自覚してやっている。専門家と学生が長期にわたって継続的に関わり続けることで、持続的な関係を築いていくことが必要。



えんまとおり復興計画模型

3.2 「東日本大震災での活動（仙台被害認定調査支援、大槌瓦礫（おもかげ）プロジェクト）、矢吹町まちづくり支援プロジェクト」

東京大学生産研：岡村健太郎（D1）、三村豊、中山利恵、田口純子、汪哲、金指大地、築瀬亜沙子、近藤佑子、島匡宏、林憲吾（地球研）

発表概要（岡村健太郎記）：

東京大学村松研究室では、東日本大震災を受け、被災地に対し建築史・都市史を学ぶものとして何が出来るかということをお話合ってきた。建築・都市の歴史研究という中長期的な時間スパンでものごとを考えることを得意とするわれわれならではの活動がないかを話し合い、偶然の出会い等を経て、現在研究室では震災に関連し大きく3つのプロジェクトに取り組んでいる。以下、各プロジェクトの内容を簡単に紹介する。

■ 建物被害認定調査の支援プロジェクト（宮城県仙台市）

村松研究室では、5月2日（月）から5日（木）の4日間におたり、仙台市宮城野区役所のもとで宮城野区の岩切地区において、地域安全学会の一員として横浜市の方と協働で建物被害認定調査のサポート活動を行った。具体的には、横浜市職員とペアになり、定められたエリアにある建物の被害状況を悉皆的に確認し、建物の全壊／半壊等を判定する作業を行った。

■ 大槌瓦礫（おもかげ）プロジェクト（岩手県大槌町）

村松研究室では、6月7日（火）から13日（月）の7日間におたり、岩手県大槌町において瓦礫（おもかげ）プロジェクトを展開した。瓦礫（おもかげ）プロジェクトとは、現地調査や住民・関係者等へのインタビュー調査、文献調査等を通じて、がれきに埋もれた大槌町の「おもかげ」を記録し、それを未来に継承することを試みるものである。6月の段階で具体的にやったことは、瓦礫のなかに埋もれたアルバムやトロフィーなどの個人の思い出の品を収集しサポートセンターに届け出ること、震災後3か月経った大槌町の現状を記録することの2点である。



震災前（左）と震災後3か月（右）の大槌町

■ 矢吹町まちづくり支援プロジェクト（福島県矢吹町）

現在、福島県矢吹町において、震災により被害を受けた酒蔵の改修のためのワークショップや、県の近代化遺産にも指定されている旧屋形医院という建物の除染活動などを通し、地域住民を巻き込む形でまちの復興・再生に向けた活動を構想している。8月には町長を含めた関係主体全員が矢吹町に集まり第一回目の会合を行い、現在は活動主体となる団体を作るための準備作業を行っている段階である。

奇しくも、3つのプロジェクトは今回の主な被災地である岩手県、宮城県、福島県にまたがっている。震災は、それぞれの地域に異なった形で影響を与え、今後も引き続き影響を与え続けるであろう。3つのプロジェクトを通し、自ら積極的に被災地に関わったものの責務として、今後も中長期的にそれぞれの

地域で貢献できる方法を考えていきたい。

3.3 「笑顔のかまいし応援隊

～岩手県釜石市・震災復興WS～

関東学院大学A：村上 祐香(M1)、 椎名明日翔 (B4)

発表概要（菊地未来記）：

笑顔のかまいし応援隊とは、まちづくりを行って来た経験豊富な先生方が10年前にまちづくりに関わった釜石市を笑顔にしていこうという想いから始まった。そこに学生も加わり、より顔の見える支援というものにしていった。

震災後1ヶ月くらいで始まった活動だが、自分達学生の関わったものは大きく3つある。震災復興ワークショップ(以降WS)、ゆめあかりプロジェクト、種まきワークショップである。

震災復興WSでは、市民、学生、専門家(先生方)がグループとなり、対象地を「東部地区」「鶴住居地区」の2つの地区に分け、さらに「防災」「産業」「住宅」「地域性」というテーマを設定し、計8チームでテーマに対して意見交換をし、課題を探り、構想を練り上げ、アイデアを具体化した。

思ったことは、多種の方がいること。災害によって家を失った人でもまた同じ所に住みたいと言う人もいれば、内陸の方へ移り住んでしまった人もいたり、また、自分達のようなよそ者に対して好感を持ってくれる人もいれば、反感を持つ人もいる。それを実感した。

ゆめあかりプロジェクトでは鶴住居地区にある旅館「宝来館」を明るく灯すことで、そこに人を感じ、人を呼び込むように、宝来館が人々の安らぎの場となるように、そして地域一帯を灯せるのではないかと考え、実際に施工を行った。

種まきWSでは、安らぎを与える場所をつくる事を目的に、津波で流されて基礎しか残っていない住宅のところに花壇を作り、人がすわれる場所を作った。人は座って空を見上げることに希望を持つことが出来るのではないかと考えた。



種まきWSにて植えた種が咲いた様子

今後も、釜石市で復興のお手伝いをしていき、より多くの人が笑顔になれるよう、学生としてでも出来る事をしていく。

3.4 「LDSE について(関東ランドスケープデザイン学生作品展)」

関東学院大学B：菊地未来(M1)、 山田諭(M1)、

山田晋平 (B3)

発表概要（菊地未来記）：

LDSE とは、関東地方のランドスケープを学ぶ学生がランドスケープを社会や他分野の学生に対して発信することを目的として活動をしている団体。企画・運営まで学生が行っている。

2005年：「一積の風景」というテーマ。

2006年：WSを行い、作品制作→展示会。

2007年：作品制作→展示会。

2008年：「風景ソウゾウ」をテーマ

2009年：「50年後のみなとみらいの都市を考える」がテーマ

2010年：「season of city 四季を感じる都市」をテーマ。

2011年：「humann links」をテーマとし、人と人との繋がりにつ



過去の学生作品の一部

いて考えようと感じた。

なぜ建築の学生がランドスケープを学び、活動をするかというのは、自分の研究室がそれをてがけていることもあるが、考える過程は建築もランドスケープも同じだからと考えているからである。また他分野の学生との交流により、自分自身の成長に繋がると確信しているからである。これからは建築やランドスケープ、都市計画などの縛りを超えて、様々な経験や知識を身につけていく必要があると感じている。

4. 語り合い

例年なら直ぐに各チーム入り混じっての個別の語り合いに入るところであったが、東大チームからの提案でこじんまりしているので全員で討議することになった。

討議は、大震災を中心に、早稲田大学の中越地震の復興から何を学び取って今回の大地震の復興に役立てるべきかと、という主旨で議論に花がさいた。

第一の論点：中越の時には商店街はアーケードを撤去したが、釜石ではアーケードの再建を考えている。この違いは、どんなところに根ざしているのか。

第二の論点：仮設住宅についても、中越のときの教訓が今回生かされているのかどうか。今はウッドデッキを使ったり、互いの入り口を向き合うようにして、コミュニティを少しでも活性化しようと試みられているという。熱っぽくトークラリーが続いた。

第三の論点：学生が復興計画に参加することの意味について、市民にとっては大学教員や行政の方に意見をいうよりも学生諸君のほうが言いやすく、話をはずませてくれるから、という実感があつたという。

第四の論点：東大でも何チームも釜石に入っているのに、横の連絡がまるで無い。これは東大に限らず、どこでもそうであったという。ましてや大学間の連携など、とよく及ばないところである。学生諸君の燃える思いがつかないことが指摘された。

集中討議スタイルの後、福井大の方からの提案により、(これまでどおりの) 個別に自由に語り合うことになり、学生間では議論がさらに過熱した。

5. 学生のコメント

福田裕子氏 (日本女子大M1)

今回このような企画に初めて参加したが、非常に刺激になった。普段の学内授業や研究活動だけでは他大学他研究室の様子を知る機会がなく、被災地に向けて行っている具体的な活動を知る事が出来た事は大きかった。今回は早稲田大学のグループは新潟、関東学院は岩手の釜石…といった形で別の震災における活動についての発表があったため、それぞれの良い点を活かした今後の活動への展望を考えるきっかけにもなったと思う。特に今回の東日本大震災では地方であるというポイントが非常に大きく、継続的な支援が望まれる事は確かである。新潟の活動に関しては現在も続いているという事もあり、興味深い内容だと感じた。

今回のシンポジオンを通してさらに考えなければならぬと個人的に思ったのは、自分の大学が何をしたかではなく、その中で現地の大学や住民がどのように関わっていたかという事である。参加住民以外にもその地域には多様な年代、意識を持った住民が生活しているため、どのような形で意見を吸い取るかは非常に難しい。今回の震災を通して防災に対する意識が変わった生活者の数は多く、それを今後へ繋げていく活動も重要なのではないだろうか。建築を通しての環境整備等々必要な支援も数多く存在するが、早さが求められるその時こそ、住居学を専攻する一人として、住民を主体とした視点を常に持ち続けていたいと思った。

大橋清和氏 (早稲田大学M2)

学生シンポジオンで、東京大学、関東学院大学がそれぞれどのような活動を行っているかを知り、交流できたことが良かったです。特に、東大の建築史の視点からの個人の思い出の保存、残っている建物の記録等を行っている事。また、関東学院大学の夢明かりや種まきワークショップなどの建築のデザインの視点など、それぞれの所属が色濃くて発表であったと感じました。もっと環境や土木といった分野が違う人たちがいろいろ発表し、総合的に議論できたら面白かったと思います。

さらに、私たちの体験した柏崎の復興が今後どのように、東日本大震災にフィードバックできるのかを考えるきっかけとなり、特に都市計画の中では当たり前になっている事も、他の分野では全然知られていない事があるというのを身をもって知ったので発信や情報共有をしていかなければいけないと感じました。貴重な体験の場をセットしていただきありがとうございました。

岡村健太郎氏 (東京大学D1)

被災地の支援等に関する様々な取組を知ることができ、大変勉強になった。特に関東学院大学が活動している釜石市は、われわれが活動している大槌町の隣町であり、今後何らかの連携や協同体制が取れればと考えている。このような機会を与えてくださった、富樫氏をはじめとする福井大学の方々に深く感謝したい。

今回のシンポジオンにおいては、学生によりボランティアをはじめとする様々な活動を互いに紹介しようという目的は十分に達成されたように思う。しかしその一方で、なぜその場所なのか、その活動による経験が他の地域においてどう生かされるのか、といったより俯瞰的な視点が不足していたように思う。単なるボランティアではなく大学の研究室として活動を行う以上、個別の活動のなかになんらか学術的普遍性の獲得を目指したいと、自戒を込めて考えている。

また、今回の発表では簡単な紹介に終わってしまったが、われわれが活動を行っている矢吹町を含む福島県中通り地方は、三陸地方に比べてボランティア等の支援も行き届いておらず、またそもそもそこに住み続けてよいのかという根本的な問題を抱えている地域である。その点では、三陸地域よりも復興に向けた道のりは厳しい状況にあるのではないかと個人的には考えており、今後も知恵を振り絞ってまちの復興に向けた支援を行っていきたくと考えている。

菊地未来氏 (関東学院大M1)

学生シンポジオンには初めて参加させて頂きましたが、とても素晴らしい企画だと実感しました。大学の中で活動したり、競い合ったりというのも重要なのですが、自分自身はそうではなく、他大学の学生と接する事が自分の成長に繋がると感じていました。なので、LDSEであったり、NPOであったり、ゼミであったりと課外活動を積極的にするようにしています。

それは自分自身の成長のためと思って始めた活動であっても、そこには大切な仲間が出来たり、新しい情報や世界があったりと、自分自身の活動や考えを広げてくれる場となっています。それに気付いたのは学部3年生の時で、今思うと「なんでもっと早く気付かなかっただろう」と思います。だから後輩には後悔しないように、先輩として自分が教えていくべきだと思っています。

この活動に関わる学生も今年は少なかったですが、多くの学生、そして様々な学年の学生が参加出来る場になれば良いのかもしれない。

このシンポジオンで出会えた方々はすごくやる気のある方が多く、とても刺激となりました。これからも、こういった学生同士が互いの活動を【発表すること】、意見を尻込みする事なく【発言出来ること】、互いにとって刺激となる場というのは必要不可欠だと感じます。これからもこういった学生の為の場が広がって、学生同士のつながりが増える事を期待したいと思います。

今回この場を企画して頂いた富樫先生、また、シンポジオン

後の討議の場にて様々なお話をして下さった素晴らしい指導者の方々、参加してくれた学生、様々な人に助けて頂いて、自分があります。本当に感謝しております。

是非、来年度もお会いして、語り合えればと思います。本当にありがとうございました。

野田真士氏（福井大学D1）

今回のシンポジオンは会場が早稲田大学であったことから報告者全員が関東近辺の大学の方々でした。時節的なこともあり、東北や新潟の震災復興をテーマにした取組の報告が多かったですね。みなさん関東在住ということで、北陸に住む私たちより先の震災で受けた被害や生活上での不便さなどは感じておられるのだらうと思います。そんな立場でありながらも敢えて被災地に足を運び、地域再興のためのまちづくりに励むみなさんの素晴らしい活動と意識の高さに心強さ、頼もしさを感じました。

また報告後の自由討論、個別ディスカッションではさらに興味深いお話を聞くことができました。「何度足を運んでも、結局我々は地元の人間ではない。地域の方々にはよそ者が、という目で見られることもある」のだそうです。

関東の識者はじめまちづくりに慧眼をお持ちの学生のみなさまがアンテナ的に地域に入り、一枚岩となるためのステップの困難がお話を聞いてよくわかりました。3月の震災を機に、建築・まちづくりに携わる人間の意識はまた大きく変化したと思います。それはわれわれ若い世代も同じでしょう。地域・立場は違えど、「自分たちができることを」と真摯に取り組む姿勢に深い感銘を受けた一日でした。

6. 職業人からのコメント 栗原知子氏(福井大)

今年度は東日本大震災関連を中心に様々な活動が寄せられ、また、参加大学の活動内容もハイレベルなものばかりでした。当企画が始まってから数年間参加してきましたが、例年の進行とは違い、学生側から「全員で話合うことで課題を共有し議論を深めたい」という意見が出され、参加者全員が集まり一つのテーブルを囲んでフリートーキングを行うことになりました。学生自身が積極的に進行役を務め、議論が深まり、当日の司会進行だった私も大きな刺激を受けました。

シンポジオン後の討議の集いは例年通りアルコールも入り、学生、実務者、様々な立場の参加者がそれぞれの垣根を越え、熱心に語り合いが行われました。今年度は年配の方々の参加も多く、高度経済成長期から現代までの社会の流れや建築の歴史等、私自身も新鮮で興味深いお話をたくさんの方々からうかがうことができ、充実した時間を過ごすことができました。

震災関連の報告が多かっただけに「いま私たちにできること」を考え、自主的に行動する大切さに気づかされた学生や自分で課題を見つけ出す力のある学生が多かったように思います。今年度は、例年とは少し違った、語り合いのシンポジオン・討議の集いとなり、今後の開催が一段と楽しみになりました。

7. おわりに

3つの学校の方々、精力的な発表、ありがとうございました。

また活発な議論、ありがとうございました。今回の貴重な出会いや体験を今後に向けて励みにしていただければと思います。

最後になりましたが、皆さんのがんばりに期待しております。

編集：栗原知子（福井大）、野田智（福井大）、富樫豊（建築人）